現代中国における日本文化の受容

——「かわいい」美意識を中心に

孫 凌波 （沖縄県立芸術大学）

中国の主流美意識はかわいいものよりはむしろ立派なもの、壮大なものを好む。それにもかかわらず日本から流入した、いわゆる「かわいい文化」は現代中国で人気が高い。この点についてはすでに楊偉が『日本文化論』（2008）で短い言及を残しているが、本発表はより多くの事例を交えて議論を前進させることにしたい。「かわいい文化」の中国での発展を明らかにするために、本発表ではアニメーションとサブカルチャーの領域を対象として、そうした傾向が顕著な事例を取り上げる。

1978 年に「日中平和友好条約」が締結され、日中の政府間、および民間の各分野における交流が始まり、日本から入ってきた「かわいい文化」と呼ばれる大衆文化の影響で、中国人の好みは主流美意識から離れ始めた。1990 年代に中国で放映された『ドラえもん』や『美少女戦士セーラームーン』などのアニメは人気を博した。このような日本のアニメが大量に導入される前、中国のアニメは国画、水墨、切り紙などの伝統芸術的なスタイルで制作されていたが、日本アニメの流入後、そのありさまは一変した。『縁結びの妖狐ちゃん』（2012）の主人公塗山蘇蘇はセル画調のかわいい少女のイメージに対応している。アニメ以外にも、ヴィジュアル系とロリータファッションなどは中国でも流行している。

しかし、中国は「かわいい」美意識のたんなる受け手の立場であり続けるわけではなく、中国独自の発展を遂げようとしている。こうした発展の中で最も注目すべき現象として「伝統への回帰」がある。例えば『縁結びの妖狐ちゃん』はセル画調のかわいい少女を用いて、中国の縁結び神と九尾狐の神話を語った。また、「甘ロリ」「姫ロリ」と「ゴシック」が主流のロリータファッションに「中華風」というスタイルが生まれた。2024 年上海芸術展では、日本のイラストレーター米山舞の作品が中国刺繍の伝統的な技で表現された。日本のポップカルチャーを受容するだけでなく、中国にも中国らしいファッションができつつある。漢服は歴史の本や時代劇でしか見かけない物であった。その中でも色鮮やかな「齊胸襦裙」は、「かわいい文化」の洗礼を受けた若い世代の目に留まった。それをアレンジした新「漢服」を着るファッションが流行した。それ以降、漢服を着る若い女性が増えるにつれ、漢服も「かわいい」ファッションの視点からとらえ捉え直された。漢服は次第に誰でも着られるようになり、いまや個性を体現するファッションとなったのである。

中国らしい「かわいい文化」の出現は、中国の新世代が自国の文化を見直すことを意味している。このポップカルチャーにおける伝統回帰という現象は、21 世紀の中国文化の構造を読み解くうえで極めて興味深い材料を提出していると言えよう。